

新しい教科書活用の視点

- 図画工作・美術科における教科書の役割 -

三 澤 一 実

(文教大学教育学部)

How to Use the Textbooks in Japanese Art Education

MISAWA KAZUMI

(Faculty of Education, Bunkyo University)

要 旨

日本の図画工作・美術科の教科書は、アメリカのDBAE理論に基づき構成されている教科書と対照的である。DBAE理論に基づいた教科書は、学習目的及び学習の仕方が明確であるのに対し、日本の教科書は題材を提案する形でまとめられている。日本の教科書の特徴は表現の多様性を打ちだしている点である。このような日本型の教科書を活用する視点をアメリカの教科書「Art in Action」と比較して考察する。

はじめに

日本の図画工作・美術科の教科書は、アメリカのDBAE (Discipline-Based Art Education) 理論に基づき構成されている教科書と対照的である。DBAE理論は美学的な審美体験そして美術批評や美術史を学びながら、自らも習得した知識に基づき制作し学習していくプログラムであり、学習目的及び学習の仕方が明確である。それに対し、日本の教科書は題材を提案する形でまとめられており、学習の目的や学びの手順は指導者である教師の指導に任されている。

このような日本型の教科書を活用するキーワードは価値の多様性であろう。人によってさまざまな表現があるという表現の多様性を保証することにより、子どもたちは積極的に自分らしさを発揮し学習活動に取り組み個性

を伸ばすことができるのである。

教科書は子どもたちが学ぶための教材であり、学び方をも示してくれる。また、教師自身の指導や子どもたちの学び方を変えていくツールでもある。

そこで図画工作・美術科における教科書の役割をアメリカの教科書「Art in Action」*1と比較しながら、日本の図画工作・美術科の教科書活用の視点を以下に考察したい。

図画工作・美術科における教科書使用の現状

法的に使用を義務づけられている教科書であるが、図画工作・美術科では授業においては必ずしも十分に活用されているとは言えない。(財)教科書研究センターで行った「教科書の耐久度についての調査調査」*2において、

「あまり使わない」と答えた割合が小学校1学年で18.8%小学校5学年で40.8%中学2学年で68.4%(平成11年度調査)というデータがある。使用頻度は学年が上がるにつれ低くなり、中学校2学年においては「必ず使う」「ほとんどの授業で使う」と答えた教師は0%である。また、筆者が行った「教科書利用実態調査」*3でも「あまり利用しない」「利用しない」と答えた教師が小学校で47%、中学校で92%であった。

教科書利用実態調査の「これからの教科書に望むこと」についての回答では、小学校では「技法的内容を重視して欲しい」55%、「題材集(参考作品)や子どもの作品を重視して編成」47%(小学校・全科)であり、小学校全科の教師が美術を専門的に学んでいないために技術的な不安を表す数字となっている。中学校においては「鑑賞作品及び美術史的内容を重視して編成」が58%「題材集(参考作品)や子どもの作品を重視して編成」が50%であり、鑑賞重視の新教育課程を意識した内容になっている。

図画工作・美術科の特性

図画工作・美術科の特性は、題材をもとに子ども自身の全体経験を生かした造形活動を行う点で知の獲得方法は他の教科とは異なってくる。子ども自身が経験した様々な経験をもとに造形活動を展開し、新たな美的経験を自ら創り出す中で知を獲得していくのである。

哲学者の中村雄二郎の言葉を借りると「自己の全体経験によって集められ、選ばれ、内面化、身体化された理論や知識を自在に組み合わせ対象に迫ることであり、そこに絶えず創造の喜びを感じること」*4である。この「内面化、身体化された理論や知識を自在に組み合わせ対象に迫る」という追求のプロセスはまさに美術教育で行っている学び方そのものであり、自分自身の美的な価値基準をもとにして創造体験を積み重ね、常に美的

な価値基準をより高いもの書き換えていく。言い換えれば、美的感覚を研ぎ澄ませていくプロセスなのである。この美的感覚とは単なる視覚的な美しさのみを指すのではなく、心地よさや心の豊かさを含む感性であり、日常生活の中で人がよりよく生きていこうとする一つの基準になるのである。そしてその美的な価値基準の集合体は広義において文化を形成していく要素にもなっていくのである。

中等教育用「Art in Action」との比較

「Art in Action」は1980年代アメリカで鑑賞教育を中心に開発されたカリキュラムDBAE(Discipline-Based Art Education)に基づき構成されてる。例えば Unit Drawing Objects and Figures の章*5の中でアンリ・マチスの作品を取り上げ、線描(Contour Drawing)について次のように書かれている。

「単純なかたちの対象を注意深く輪郭をたどりながら観察しよう。この見る練習は、アーティストたちがどのように目の前の対象を観察して彼らの感じた世界を表現したか教えてくれよう。芸術は全体の姿や形そしてまた細部に対しても集中して観察できる優れた手段になる。...このレッスンのねらいは線を使って対象の姿形を捉えることである。」

図版にはマチスの「Girl with Gold Necklace」を取り上げ、その解説として次のように書かれている。

「マチスは単純な流れるような線を使って金のネックレスをした女性を描いている。彼が絵を描く上でどのように線やパターンを変化させ駆使しているか注意してみよう」

ここでの問いは作品の線の魅力に注目させ、単なる作品の印象を述べるに終わらせず、より美術的な分析力を問うている。そのような点では作品鑑賞に求められる要素が分析的考察であり作品及び作者の理解を中心に構成されている。

次頁では、対象を観察し輪郭線で表すため

に具体的な訓練の指示が与えられる。その内容は細かく手順まで記述されており、教師はそのテキストに従って授業を進めればよい。いくつか印象的な指示を拾い出してみよう。

「花瓶やカップ、靴などの単純な対象を用意しなさい。最初にその対象の輪郭に沿ってゆっくりとそして丁寧に目を動かしなさい。…次に紙を見ることなく対象を見つめ輪郭を描きます。…紙に鉛筆をおき、対象をよく見て慎重にあらゆる線とカーブをたどって輪郭に沿ってゆっくりと目を動かす。目の動きに合わせて同様に同じ速度で鉛筆を動かしなさい。…紙を見るな。…このレッスンの目的が、手と心の中の神経が接続していることを発見することであり、現実的に線を引くことではないことを思い返しなさい。…描き終わって初めて絵を見なさい。あなたの描いた線が対象の輪郭に似ているか見てみなさい。さあ、あなたは今度、形を正しく捉えるために、描きながら画用紙を時折ちらっと見て輪郭の修正を行えるようになる。きれいなシートをとりなさい。…目は対象の輪郭を追うことに90%を使いなさい。…最初の絵に比べ目と手が連動するようになりましたか？」

以上のように、授業の目的及び学習活動が非常に明快に示されており、生徒は全て同じプログラムに則って教師の指示通りレッスンを進めればよい。使用する材料も記されている。

DBAE理論に基づき編集されているアメリカのシステマチックな教科書は、芸術作品を例示しながらそのよさや魅力を発見させ、その上で学び取る内容に合った造形訓練や作業を通し芸術家の表現に呼応した疑似体験をさせる。そのことにより作品に対する解釈、理解がより深まり、取り上げた代表的な作品を通して総合的に美術や社会における芸術の果たす役割などを理解させていくのである。

日本の教科書を捉え直してみる

「教科書利用実態調査」の結果によれば、小学校の教師は技術指導書的内容を欲しており、中学校の教員は美術鑑賞に重点をいた教科書を求める傾向が見られる。その点、前述の「Art in Action」はこのような日本の教師の要求を見事に満たす内容となっている。しかし、果たして、日本の教育に適した教科書と言えるであろうか。A社の中学校美術の教科書PR冊子*6の編集の基本的方針に「弾力的な指導や多様な活動が可能な教科書」という記載がある。この「弾力的な指導や多様な活動」という内容は「Art in Action」に見ることができない点である。「Art in Action」では子どもたちの学び方が具体的に細部に渡り示されているのに対し、日本ではその指導は教師の工夫に任されているのである。つまり、教科書の活用方法については教師に一任され、その結果、美術の授業が教師の力量に大きく左右されるという問題を抱えている。例えば、悪しき作品主義や題材の意図や目標を明確に持たないまま自分の好みで評価をつけている教師や、教科書に示された学びの目標を読みとれずに未だ画一的指導によって時代遅れの授業を展開している教師も数多い。ここに学習の目的や手段が明確に読みとりにくい日本の題材提示型教科書の弱点がある。しかし、日本の教科書はこのような弱点を持ちつつも「Art in Action」には見られない次のような魅力を持っている。

多様性をキーワードに教科書活用の視点

まず、日本の教科書に見られる魅力は作家や子どもの作品を中心とした掲載写真の多さであろう。文字による説明が少ない分、様々な写真を使って視覚的に訴え子どもたちの学習における興味や関心を高めている。初めて教科書を手にして見るときの子どもたちの目の輝き、集中力には驚かされるものだ。

日本の教育は知識偏重の学びから基調を転換し「生きる力」を合い言葉に21世紀を生き抜く決意をした。その中で、美術は知識として美術の大系を学ぶのではなく、美術の活動を通し自らの力で知を学び取る方法を選択した。つまり、子ども自身の学習要求に即した学び活動を保証することで子どもの学びを充実させようということなのである。

そこで、子どもたちに教科書を通して様々な価値（作品）や美術の行為を示し、その示された価値や行為をもとに自分に合った学びの手段を自ら見つけ出すことができる内容が必要となるのである。つまり美術の表現や行為において教科書に示された価値の多様性が子どもたちの学習を充実させるキーワードとなってくるのである。その点において掲載写真の多い日本の教科書はこの価値の多様性をしっかりと打ち出しているのである。

しかしながら、いくら教科書で美的価値観の多様性を示したところで、教師が教科書の意図を汲んで活用しないことにはその特長も生かされない。例えば、中学校美術指導要領で「スケッチ」という言葉が出てくる。このスケッチという言葉のイメージは教師によって様々であり、中には「スケッチする」という言葉を対象をそっくり再現する能力と捉え、鉛筆デッサンを基礎・基本として重視している教師もいる。鉛筆デッサンで学べることも多い。しかし、一つの技法、固定化された価値基準を教え込むことは教育の目的ではない。このような教師の固定観念をうち破るのも教科書の力である。

教科書には様々な作品を載せるべきである。子どもたちにとって憧れる作品はもとより疑問を感じる作品、自己開示を促す作品、自国の文化や伝統を学ぶ作品、異文化の体験など。そのような多種多様な作品を学習目的にあった題材と照らし合わせ掲載していくことが日本の美術教科書のよさであり今後ますます求められるものとなるであろう。このような多

くの掲載作品による多様な価値観の提示は現場教師に意識改革を迫り、美術教育の根元的な目的を常に教師に意識させるようになる。そして子どもたちにも自分自身の個性を確認させ、生き生きさせる手助けとなるのである。今回各社から出された教科書は新教育課程に基づいた最初の教科書であり各社それぞれ工夫が見られその努力は大いに評価できる。しかしながら、今、そしてこれから求められる図画工作・美術科の役割から教科書を再点検すると、今以上に価値の多様性に裏付けられた、美術の持つ懐の広さを打ち出す内容であってもよいであろう。

参考文献

- *1 Guy Hubbard, Art in Action, Coronado Publishers, 1986
- *2 「教科書の耐久度についての調査調査結果報告書」財団法人教科書研究センター、2000
- *3 教科利用書実態調査 2002.8月実施 対象 埼玉県の小中学校教諭56名 中学校教諭36名、東京都の小中学校専科教諭19名。それぞれ任意に抽出。
- *4 中村雄二郎、「知の変貌」、弘文堂、1978、p41
- *5 Guy Hubbard, Art in Action, Coronado Publishers, 1986, pp46-47
- *6 「新しい教科書はこう変わる」内容解説資料、日本文教出版、2001
 - ・「中等教育資料」7月号、文部省1998、pp68-69
 - ・「美術学習指導書 指導編1」開隆堂、2002
 - ・倉田三郎監修 中村徹編著「日本美術教育の変遷」日本文教出版 1979